

山形県における斑点米カメムシ類の発生実態と  
本田薬剤散布後の除草による防除対策山形県農業総合研究センター水田農業試験場 <sup>うえ</sup>の野 <sup>きよし</sup>清

## はじめに

山形県は、県産‘つや姫’を中心に‘はえぬき’等複数の銘柄で日本穀物検定協会による食味ランキングでは特Aに格付けされている良食味米生産県である。県内で生産された米の1等米比率はおおむね85~95%で推移している。現在、県内における水稲の最も問題となる害虫は斑点米カメムシ類である。検査数量に占めるカメムシの着色粒による落等率が3%を超えたのは、1998~2017年の20年間で8回あり、特に1998~2005年までに7回発生している。2006年以降は、2010年に4%となった以外は3%を超えるようなことはなくなっている(図-1)。その一つの要因として、斑点米カメムシ類を対象とした薬剤が、有機リン剤や合成ピレスロイド剤からネオニコチノイド系薬剤に代わり、2006年に県内に広く普及したことに関連付けられている(永峯・中島, 2017)。一方で、カメムシ類の生息場所である畦畔・農道の雑草対策について、過去と現在の対策を比べてみても大きくは変わっていない。

ここでは、山形県における斑点米カメムシ類の発生実態および、筆者が出穂期以降の本田薬剤散布後に除草を行い、斑点米カメムシ類の防除について検討した結果を紹介する。

## I 斑点米カメムシ類の発生実態と防除対策

## 1 斑点米カメムシ類の発生動向

1999年の斑点米の多発生以降、山形県における斑点米カメムシ類の主要種はアカヒゲホソミドリカスミカメ(以下アカヒゲ)、次いでオトゲシラホシカメムシであったが、2008年以降はアカスジカスミカメ(以下アカスジ)の生息地域が拡大し、全体に占める割合も増加し

ている(図-2)。病虫害防除所の調査によると、アカスジは1999年に数十年ぶりに確認されたが、その後しばらくは発生が確認されなかった。しかし、2007年に県内44調査地点のうち3地点で確認されると、年ごとに拡大し、6年後の2013年には44調査地点すべてで確認された(田渕ら, 2015)。これは東北、北陸地域の他県に比較すると、やや遅れての分布拡大、発生量の増加であった。2011年には、捕獲されるアカスジの個体数がアカヒゲよりも多くなった地点が現れ、県全体で50%を超えた。アカスジが主要種となっている地点は多く、現在もこの傾向は続いている。ただ、調査地点における両種の割合は、アカスジが高い傾向にはあるが、アカヒゲ、アカスジの混発している圃場が多いことから両種に対応できる対策が必要とされている。

## 2 薬剤防除の状況

本県での2017年産の水稲作付品種割合は、‘はえぬき’62%、‘つや姫’15%、‘ひとめぼれ’9%、‘コシヒカリ’6%で、斑点米カメムシ類の発生量の変動要因となる出穂期には1週間程度の幅があり、割刈率も品種によって差が認められる。育苗箱施用剤の施用によりいもち病およびイネミズゾウムシ等の初期害虫の防除が行われ、出穂期前後からいもち病、斑点米カメムシ類を対象に1~3回の本田防除が行われている。出穂期前後のいもち病と斑点米カメムシ類の防除は必須となっているが、防除適期が異なるため、同時防除として薬剤散布する場合は、適期に散布できない可能性がある。斑点米カメムシ類に対する効率的な防除法は、出穂10日後のジノテフラン剤の散布であり、1回の散布で2週間程度の防除効果があると考えられている。また、斑点米の多発が予想されなければ追加防除は必要ないことが示されている。しかし、圃場によっては複数回の薬剤散布でも斑点米カメムシ類による被害が発生している地域もある。そのため、本県での殺虫剤の散布は、穂揃期とその7~10日後の2回防除を基本とし、斑点米の発生が懸念される場合は追加防除を実施するようにしている。実際の農業散布は、個人防除と委託による無人ヘリの広域防除があり、現在は無人ヘリによる防除が約7割を占めている。また、先に述

Occurrence of Sorghum Plant Bugs Causing Pecky Rice in Yamagata Prefecture, and Control of them by Mowing Paddy Leaves after Insecticide Application during the Ripening Peribod. By Kiyoshi UENO

(キーワード: 斑点米カメムシ類, 殺虫剤散布, 畦畔草刈り, 斑点米)